

## 果樹カメムシ類の多発生が懸念されます

果樹カメムシ類(写真1,2)は、なし、りんご、ももなどの果実を吸汁することで、奇形果を生じて品質低下の原因となります。

近隣各県(茨城県、神奈川県、静岡県など)の調査では、本年の越冬量は多いと報告されています。また、チャバネアオカメムシの越冬量は、前年度のスギ・ヒノキ球果の収量が多いと多くなる傾向があります。栃木県林業センターの調査では、昨年度の球果収量は過去10年でスギは2番目に、ヒノキは最も多くなったことから、本年は山林における5~7月の越冬世代成虫の発生量は多いと予想され、果樹園への飛来にも注意が必要です。



写真1 チャバネアオカメムシ



写真2 クサギカメムシ

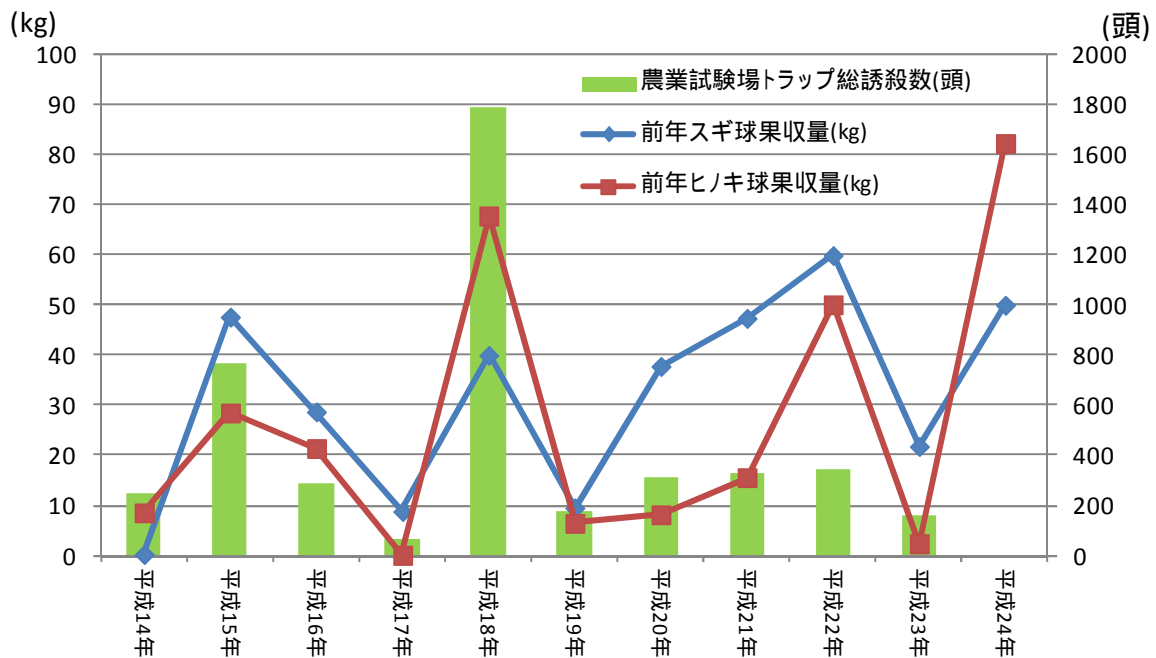


図1 フェロモントラップのチャバネアオカメムシ誘殺数と前年のスギ・ヒノキ球果収量

【防除対策】

- ・落花・結実後、速やかに多目的防災網を展張する。
- ・袋掛け栽培では、早めに袋掛けを行う。
- ・カメムシ類の飛来は長期間続くため、残効期間の長い合成ピレスロイド剤やネオニコチノイド剤が有効である。ただし、同系統薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発生（リサージェンス）に繋がるため、異系統の薬剤をローテーション散布する。

【防除にあたっての留意点】

- ・特に、山林（スギ・ヒノキ林など）に隣接するほ場や、過去に多発したほ場では注意が必要である。
- ・ほ場内をよく観察して、飛来が認められたら防除を行う。
- ・夜温が下がらず雨の降らない日はカメムシ類が飛来し易い。
- ・カメムシ類は日没後に飛来するため、夕方が早朝の薬剤散布が効果的である。ただし、早朝に薬剤散布を行う際には、周辺住民への騒音等に配慮する。
- ・合成ピレスロイド剤は殺虫効果が、ネオニコチノイド剤は忌避効果が比較的長く持続するが、その効果は天候などによって左右される。薬剤の特性をよく確認して使用すること。

表 1 なし・りんご・もものカメムシ類に登録のある主な薬剤(平成24年4月20日現在)

薬剤系統	薬剤名	なし	りんご	もも	使用倍率	使用時期 (収穫前日数)	使用回数
ネオニコチノイド剤	アクトラ 顆粒水溶剤				2000倍	なし,もも:前日 りんご:7日	なし,もも:3回以内 りんご:2回以内
	ベストガード 水溶剤		-	-	1000倍	14日	3回以内
合成ピレスロイド剤	Mr.ジョーカー 水和剤				2000倍	なし,りんご:14日 もも:前日	2回以内
	アグロスリン 水和剤		-		なし:1000~ 2000倍 もも:2000 倍	なし:前日 もも:7日	なし:3回以内 もも:5回以内
	アーデント 水和剤		-		1000倍	なし:7日 もも:前日	3回以内
有機リン剤	スミチオン 水和剤 40				800~1000倍	なし(有袋):14日 なし(無袋):21日 りんご:30日 もも:3日	なし,もも:6回以内 りんご:3回以内

詳しくは、農業環境指導センター（<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/>）までお問合せ下さい。

また、当センター携帯サイト(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/keitai.htm>)もご利用下さい。

( 0 2 8 - 6 2 6 - 3 0 8 6 )